慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「まれに」とrarementの対照研究(3)
Sub Title	Etude contrastive de mareni et de rarement (3)
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.89, (2005. 12) ,p.289(28)- 299(18)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	立仙順朗教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0299

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「まれに」と rarement の対照研究(3)

喜田　浩平

和仏辞典は日本語の「まれに」の訳語として必ず rarement に言及している．しかしそれぞれの意味的特徴を詳細に分析すると、確かに低い頻度を表す点で両者は類義関係にあるが、それぞれを含む発話の「方向性」が正反対であるため、翻訳の際には注意を要する。筆者は以前、二つの論考[1]でこのような主張を行った。

この主張に関して基本的には変更すべき点はないが、細部で若干補足しておきたい。「方向性」の概念に関する問題を二つ議論し、「まれに」とその類義語の比較に関する問題を一つ指摘する。

1.「方向性」の概念

先に発表した論考では、「方向性」の概念がキーワードであった。それを、デュクロの一連の研究を参考にしつつ、発話の接続の仕方との関連で特徴づけた。とりわけ「A なので、B だ」という構文の中で A の位置に「まれに」などの表現が含まれる場合に、B にどのような影響を与えるか、という点に着目した。

ところで、デュクロや本稿の筆者の立場とは異なる観点から、「方向性」の概念に言及し、rarement などの副詞を分類する研究も存在する。この点には先の研究でも触れておいたが、「枠組みが異なる」としてそれ以上の議論は省略しておいた[2]。そこで、以下で少し詳しく見てみよう。

一例として、クリスティアン・モリニエ[3]の論考を取り上げたい。結論からいうと、モリニエの主張と本稿の筆者の主張は矛盾するものではないが、モリニエの考える「方向性」の概念を日本語に応用する際、翻訳上の問題が生じるため細心の注意が必要である、ということを示したい。

モリニエによると、まず「低い頻度を表す副詞」(adverbe de fréquence faible)のグループが区別される。以下のような副詞（表現）が該当する。

(A) accidentellement, épisodiquement, exceptionnellement, occasionnellement, rarement, sporadiquement, de temps en temps, parfois, quelquefois

このような分類の根拠として、モリニエはつぎのようなテストを提案する。

(1) Marie va-t-elle souvent au cinéma?
— Non, elle y va (accidentellement + épisodiquement + exceptionnellement + ...)
— *Oui, elle y va (accidentellement + épisodiquement + exceptionnellement + ...)

"Marie va-t-elle souvent au cinéma?"という質問に対して、non と答える場合に使うことができ oui と答える場合に使えないものが低い頻度を表すということである。

(A)のグループはさらに二つのグループに下位区分される。まず、次のようなグループである。

(B) accidentellement, épisodiquement, occasionnellement, sporadiquement, de temps en temps, parfois, quelquefois

これは、(A)のグループから exceptionnellement と rarement を除いたもので

ある。これらの表現が一つのグループを形成する根拠として、次のような共通の性質が指摘される。

(2) Marie va-t-elle souvent au cinéma?
— Non, mais elle y va (accidentellement + épisodiquement + ...)

"Marie va-t-elle souvent au cinéma?"という質問に対して、まず non と否定し、その後に「修正する」ニュアンスの mais が続き、そこに接続することができるものが(B)のグループである。モリニエは「修正する」という点について詳述していないが、おそらく疑問文の"souvent"を打ち消した後、「そうではなくて～だ」と続くニュアンスのことを指しているのであろう。

(A)のグループの下位区分のもう一つのグループは以下の二つの副詞である。

(C) exceptionnellement, rarement

この二つは、(2)のテストで不自然であるという共通点を持つ。

(3) Marie va-t-elle souvent au cinéma?
— *Non, mais elle y va (exceptionnellement + rarement)

このようにして抽出された二つの下位グループについて、モリニエは(B)は「肯定的に方向付けられている」(orientés positivement)、(C)は「否定的に方向付けられている」(orientés négativement) と記述する。さらに次のようなテストも追加される。

(4) Marie va (exceptionnellement + rarement) au cinéma, elle n'y va même pratiquement jamais.
*Marie va (occasionnellement + quelquefois + ...) au cinéma, elle n'y va

même pratiquement jamais.

ある副詞が前半部分で使用され、後半部分では même によってさらに高い段階として jamais が導入し得る場合、その副詞は「否定的に方向付けられている」ということになる。

以上のような意味で、rarement は「低い頻度を表す副詞」の一つであり、また「否定的に方向付けられている」ということが確認できる。

さて、モリニエの主張は極めて明快で、フランス語に関しては異論の余地がなく、また外国語としてフランス語を学ぶものにとって有益で示唆に富むものである。しかし、日本語の「まれに」とフランス語の rarement を比較対照するという目的においては、厄介な問題が発生する。上記の紹介からわかるように、モリニエは「方向（性）」「肯定的」「否定的」の概念を厳密な意味で定義しているわけではない。それぞれの概念が指し示すものは、(2)(3)(4)のテストを満たすか満たさないかという言語的特徴である。したがって、日本語の「まれに」がどのような「方向性」を持つかどうか判定するためには、同じようなテストを日本語に移しかえる必要がある。

では、(2)(3)(4)のテストを日本語に訳してみよう。まず(2)と(3)であるが、Marie 以下の質問部分は問題なさそうである。問題になるのは mais の訳し方である。直訳としては「しかし」「でも」「だが」などが候補になるが、上手くできるだろうか。

(5) マリーは頻繁に映画に行きますか？
　　—いいえ。しかしまれに行きます。

日本語として見ると、少々ぎこちないのではないだろうか（「でも」にすると少し改善されるかもしれない）。このテストのフランス語版で mais が果たす役割は、先述のように「修正する」という点にある。従って、少々回りくどい言い回しにはなるが、次のように意訳する方がいいだろう。

(6) マリーは頻繁に映画に行きますか？
　—いいえ。頻繁には行きませんが、まれには行きます。

つまり「「頻繁」という表現は言い過ぎで不適切だが、「まれに」ならばよい」という具合に二つの表現を対比しかつ一方を他方で修正するニュアンスが含まれている必要がある。そして(6)のテストで問題ないと判断される限りにおいて、「まれに」は「肯定的に方向付けられている」と言うことができる。

では、(4)のテストはどうだろうか。最も注意すべきは même の訳し方である。ここでも、モリニエの意図を汲み取った、テストとして適切な訳が望まれる。「～でさえ」「～ですらある」「～までも」などの訳語が頭に浮かぶが、そのままでは自然な日本語の文が作れない。一語対一語の対応を放棄して、次のような訳が相応しいであろう。

(7) マリーはまれに映画に行く。それどころか、全く行かないと言ってもいいくらいだ。

この文が不自然である限りにおいて、「まれに」はやはり「肯定的に方向付けられている」と判断できる。ちなみに、「まれに」ではなく「めったに～ない」にすると問題ない。

(8) マリーはめったに映画に行かない。それどころか、全く行かないと言ってもいいくらいだ。

つまり「まったく～ない」の方向性は否定的であり、rarement の訳語として適切であるということになる。

2. 発話の接続

上述のように、本稿の筆者が考える「方向性」は発話の接続の仕方と密接な関係がある。先に発表した研究では、とりわけ「A なので、B だ」という接続の仕方に観察を限定しておいた[4]。しかし厳密には、この接続形式だけではなく、もっと多様な構文[5]も視野に入れる必要がある。以下、この点を例証してみたい。

「まれに」の方向性が肯定的である点は、例えば次のような例によって示された。

(9) 副作用がまれに出ますので、{気をつけて下さい / ?安心して下さい}[6]。

(10)副作用が出ますので、{気をつけて下さい / ?安心して下さい}。

(11)副作用が出ませんので、{?気をつけて下さい / 安心して下さい}。

(9)と(10)、および(9)と(11)を比較すると、(9)は(10)と同じ特徴を示している。ここから、「まれに」は(10)の前半のような肯定文と同じ「方向性」を持つ、と主張した。

さて、(9)(10)(11)は「A なので、B だ」という形を取っている。しかしこれ以外の形式でも「まれに」と肯定文が同様の振舞を見せることが確認できる。

まず「A であるが、B' だ」というタイプが挙げられる。ここではちょうど、B' の部分が「A なので、B だ」の B と対立する内容になる。

(12)副作用がまれに出ますが、{?気をつけて下さい / 安心して下さい}。

(13)副作用が出ますが、{?気をつけて下さい / 安心して下さい}。

(14)副作用が出ませんが、{気をつけて下さい / ?安心して下さい}。

ただし、自然な日本語であるためには、(12)と(13)では「というのも、副作用そのものは軽微だからです」のような発話を付け加える必要があるだろう。また(14)では、「というのも、服用量を間違えると危険だからです」などの要素が不可欠である。

次に、「まれに」を含む発話 A が後半に位置するケースも可能である。つまり「C なので、A だ」という形式である。(「薬は強ければ強いほど副作用が出やすく、弱い場合はその可能性が低い」という前提があると仮定する。以下同様。)

(15) この薬は非常に {強い / ?弱い} ものですので、副作用がまれに出ます。

(16) この薬は非常に {強い / ?弱い} ものですので、副作用が出ます。

(17) この薬は非常に {?強い / 弱い} ものですので、副作用が出ません。

そしてここでもやはり、(15)の「まれに」と(16)の肯定文が同じ特徴を示している。

最後に、「まれに」を含む発話 A が後半に位置し,しかも「〜であるが」という接続も可能である。つまり「C' であるが、A だ」という形になる。

(18) この薬は非常に {?強い / 弱い} ものですが、副作用がまれに出ます。

(19) この薬は非常に {?強い / 弱い} ものですが、副作用が出ます。

(20) この薬は非常に {強い / ?弱い} ものですが、副作用が出ません。

(18)と(19)を比べれば、「まれに」と肯定文の共通性が確認できる。なお、ここでは、(12)(13)(14)に不可欠であった補足的要素(「というのも、...」)は必ずしも必要ないようである。

以上の観察が正しいならば、「方向性」の概念を「発話の接続」という

観点から特徴付ける場合、「A なので B だ」という形式だけを取り上げる特別な理由は存在しないことになる。そしてさらに観察を続ければ、「～なので」「～であるが」以外にも、さらに多様な接続形式の可能性も排除されないと予想される。

3.「まれに」と類義語

低い頻度を表し、かつ方向性が肯定的である表現は「まれに」以外にも存在する。代表的なのは「時々」「たまに」であろう。実際、「まれに」を「時々」や「たまに」で置き換えても大きな意味の違いが感じられない発話は少なくない。「副作用がまれに出ます」と「副作用が時々（たまに）出ます」のニュアンスの違いは微々たるものである。

では「まれに」と「時々」あるいは「たまに」が同義語であるかというと、必ずしもそう断言できない。少なくとも二つの点で異なることを明らかにしてみよう。

まず、「まれに」は命令文と相性が悪い。例えば一人暮らしをしている学生に向かって（甚だお節介ではあるが）次のように言う場面を想像していただきたい。

(21) まれに両親に電話しなさい。

「まれに」が単に低い頻度だけを表すならば、「両親も君の事を心配しているだろうから、安心させるために、毎日とは言わないから、週に何度か、せめて月に何度か電話したらどうだ」という（学生にとっては大きなお世話である）意味で(21)を発話することが可能であると予想されるが、実際は奇妙である。一方、同じ状況で「時々」「たまに」は問題なく使用できる。

(22) 時々（たまに）両親に電話しなさい。

ちなみに、フランス語で低い頻度を表しかつ肯定的方向性を持つ quelquefois を命令文で使うことは問題ないようである。

(23) Donnez-moi quelquefois de vos nouvelles. (Flaubert, *Correspondance*)

この観察が正しいならば、「まれに」と quelquefois が完全な同義表現ではないことになる。

「まれに」と「時々」「たまに」の違いのもう一点は、両者の相対的頻度である。いずれも低い頻度を表すことは疑問の余地がないが、この「低い」という点に関して混乱を避けるべく、要点を整理しておきたい。

まず、いずれの表現も頻度の低さは相対的なものである。ある意味では、それぞれの表現が表す絶対的頻度を、例えば社会通念や一般常識などによって想定される「規準」との比較で明示することも可能かもしれない。例えば「副作用がまれに出る」「時々出る」「たまに出る」という場合に、一般に医薬品を使用する場合に何人の人に関して何例くらいの副作用が出ると「頻繁に」出ると判断するか、何例くらいならば「まれに」出ると判断するか、という点に関して、医師や薬剤師を対象にアンケート調査し、大よその基準を設定することは可能であろう。同様に、プロ野球選手が「まれにエラーする」というのは何回くらいのエラーを指すのか、ということも大体のコンセンサスは得られるかもしれない[7]。

このような側面は否定できないが、あくまでも言語学的に「まれに」や「時々」「たまに」の表す「頻度」について語ることはできないだろうか。おそらく最も確実なのは、他の表現と比較し、それぞれの表す頻度が相対的に「高い」とか「低い」と位置づけることである。たとえば、「高い」頻度を表す表現には、「しょっちゅう」「頻繁に」「いつも」などがある。これらと比較して、「まれに」「時々」「たまに」は「低い」頻度を表すことは間違いない。複数の日本語話者が集まり、頻度表現を含む発話を理解する場合に、仮にそれぞれが絶対的にどのくらいの頻度を表すかわからない場合、あるいは各個人はそれぞれの表現が表す頻度について漠然とした

イメージを持っていても全員の間ではコンセンサスが得られない場合でも、日本語の言語構造の中で、「しょっちゅう」などが高い頻度を表し、「まれに」などが低い頻度を表す点は全ての話者が一致して認めるところであろう。

このような意味での「相対的頻度」に議論を限定した上で、「まれに」と「時々」「たまに」を比較してみよう。おそらく、「まれに」が「時々」「たまに」よりもさらに低い頻度を表すといえるのではないだろうか。試みに以下の発話を比較してみよう。

(24)太郎は、まれに図書館で勉強する。
(25)次郎は、時々図書館で勉強する。
(26)三郎は、たまに図書館で勉強する。

それぞれが表す絶対的な回数は、日本語話者によって様々であろう。(24)を「週 2 回くらい」と解釈する人もいれば、「月 1 回」と感じる人もいるだろう。(25)(26)についても同様である。しかし、(24)(25)(26)を比較し、「図書館で勉強する回数が最も少ないのは誰？」と質問されると、おそらく(24)の太郎であると答える人が多いのではないだろうか。一方、(25)の次郎と(26)の三郎については意見が分かれるか、あるいは「同じくらい」と判断する人が多いのではないだろうか。

以上の観察から、「まれに」と「時々」「たまに」の間には、少なくとも二つの違いが認められた。おそらくこれ以外にも存在するであろう。いずれにせよ、この差異が確かなものであるななら、フランス語との対照に影響を与える。「低い頻度を表し、肯定的に方向付けられている」という共通項に基づいて、日本語の「まれに」「時々」「たまに」とフランス語の quelquefois や parfoirs が類義語として一つのカテゴリーを形成すると考えられていたが、ここから「まれに」を除外する可能性も否定できない状況になったのである。

注

1) 喜田浩平、「「まれに」と rarement の対照研究(1)」、『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』39 号、2004、p.93-103 および「「まれに」と rarement の対照研究(2)」、『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』40 号、2005、p.93-106。

2) 前掲「「まれに」と rarement の対照研究(1)」、注 1 参照（103 ページ）。

3) Christian Molinier, "Les adverbes de fréquence en français", *Lexique* 1, Presses Universitaires de Lille, 1982, p.91-104. 低い頻度を表す副詞については、92-93 ページ参照。

4) 服部匡、「小さな量を表す表現の意味的性質について」、『言語研究』125、2004, p.83-109 も、方法論的に同様の制限を加え、現象的に類似した観察結論に至っている。

5) デュクロの近年の研究は、マリオン・カレルの影響の下、従来の donc に代表される「論証的」（argumentatif）な発話接続だけではなく、様々なタイプのものを根源的とみなしている。詳しくは、喜田浩平、「「ブロック」理論と「論証」理論 — mais の意味記述をめぐって」、『フランス語学研究』38、日本フランス語学会、2004、p.51-57 を参照されたい。

6) {X / Y}という表記は、「当該の文脈で X と Y を比較する」ということを省略したものとする。また「?」の記号は後続の表現の使用が指定された解釈では不自然であることを表す。

7) Co Vet, *Temps, aspects et adverbes de temps en français contemporain : essai de sémantique formelle*, Genève, Droz, 1980 は、「規準」(norme)との比較によってフランス語の souvent, fréquemment, rarement の意味を記述することを提案している。